花火を打ち上げる花火師たち

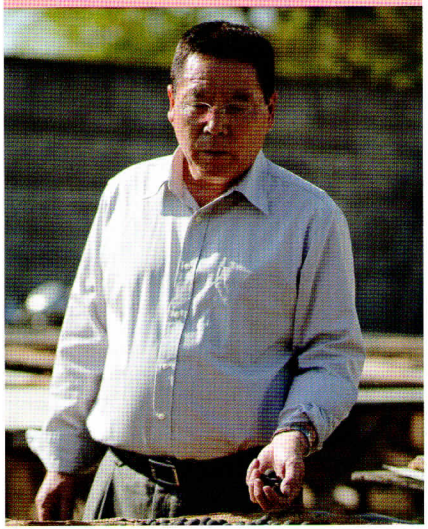
野村 x 小勝 インタビュー

Text by 落合昇平

野村花火工業

丸玉屋小勝煙火店

野村花火工業株式会社 **野村陽一氏**



明治８年創業、茨城県の野村花火工業、4代目野村陽一さん。土浦全国花火競技会で７回、大曲全国花火競技会で５回の優勝・内閣総理大臣賞を受賞、隅田川花火大会・コンクールの部でも２年連続優勝を果たすなど、日本を代表する花火師の１人として熱い視線を浴びている。

そうした輝かしい受賞歴に対して「私は4代目になるんですが、先代先々代からの野村の技術の積み重ねがあって、今があるんです。私１代だけでなるものではないんです」という。

「たとえば、他の人が良い花火を打ち上げます。“あー、いいなぁー”と思っても、それを自分のところで作ることは出来ません。花火は見えても製造課程は見えませんからね（笑）。その過程の中にその人が受け継いで工夫したオリジナルの技術があります。今咲いている花は、先代の技術がまいた種があるからです。」

花火を作る作業は大きく分けて３つの工程がある。①星掛け作業②仕込み③玉貼り作業の３つ。①は火薬を調合しながら丸めていく作業。初めは仁丹ほど小粒なものが、幾重にもコーティングされ日干しされながらパチンコ玉大からさらにピンポン玉大へと日々大きく育っていく。この間、数十日。この数十日に133年間の技術が凝縮されている。そして②の仕込み。この育てた半球に火薬玉を詰めていく。そしてこの半球を２つ重ねて球にすると③の紙貼り。この紙貼りも１日に３枚しか重ね貼り出来ない。これを日に干し、乾いたらまた貼っていく。こうして、尺玉なら約２ヶ月かかって完成。よく開けと念じて毛筆で玉種名を入れる。例えば、五重芯冠光紅点滅というように。

「こうした花火を作る基本は５年あれば取得出来るのですが、大会で勝てるには、どこかで壁を破るというか、体得がありました。作り始めて20年でした。

花火競技は、フィギュア・スケートの規定競技を思い浮かべてもらうと分かりやすいですね。いくつものクリアポイントがあって、そのポイントを組み合わせながら完成させる。一度壁を破ると、勝ち続けられますね。

今の花火は総合力が要りますね。音楽といった要素が入ってきますから、技術だけではなく感性も必要です。映画やテレビドラマ、コマーシャルといった映像と音楽は日常で気にかけてます。工房のみんなとアイデアの出し合いもします。」

「皆が楽しみにしていてくれるのが分かる。野村という名前が全国で知られるようになって、それを地元の人達が喜んでもくれてる。実際花火を上げている時は、上がった玉がよく開くかという心配でいっぱいで、皆の反応を伺っている余裕はないんですが（笑）終わってから『良かったよ』と言われるのが嬉しいですね。打ち上げた玉がグイグイと上がっていくのには高揚します。重力にあらがって上がっていく力感。開かせる以上に、上げるというそのことが、私にとって花火の魅力かもしれません」

インタビューの合間、工房を囲む林からウグイスの鳴き声が聞こえていた。野村さんが笑って言った。

「知ってます？茨城のウグイスは訛るんです。ホーホケッペキョッって（笑）。それはともかくウグイスは親から鳴き方を教わるんでしょう。だから、それぞれウグイスの鳴き方は少しずつ違うんですね」

それは代々の伝統技術を受け継いだ４代目の自分を思い重ねた話かとも思えたが、その明るい話っぷりから、普段の野村さんの好奇心や探求心が垣間見えたようで面白かった。